

ウィニフレッド・ワトソン作  
最所篤子訳

## ミス・ペティグールの素敵な一日

Miss Pettigrew Lives for a Day, by Winifred Watson, Translated by Atsuko Saisho

第八章 五時二分 六時二分

ミス・ペティグールは軽やかに通路に躍り出ました。もう何があっても眉をひそめたりするものです。まごまごしたり、驚いたり、相手をたしなめたりするのはおしまいです。目がきらきら輝いています。顔がぼつぼつと火照っています。気分は最高です。何もかもがめまぐるしい速さで進んでいてとてもついていけないけれど、とにかく、すべてを楽しむことはできています。

(気にしないわ)ミス・ペティグールは幸福にぼーっとなりながら思いました。(お母様はきつとショックを受けたでしょうけれど。しかたないわ。生まれてこのかたこんなスリルを味わったのははじめてですよ。知らない人には気をつけなさいってお母様はいつもおっしゃっていたけれど、そんなの分かったものじゃないわねえ。まあ中には破滅への使いがあるのかもしれないけれど、そもそもいったいどこの誰があたくしみたいな中年のオールド・ミスを破滅させようなんて思うでしょう? そんなことあるわけないわ。でもどうしてこういうことになったのかしら。まあいいわ。とにかくこうなったんだから。それで十分)

「だいじょうぶ?」とミス・ラフォースが気遣うように聞きました。

「さあ参りましょう」とミス・ペティグールは明るくにこやかに言いました。

「タクシーをお呼びしましょうか、お嬢様?」と一階でポーターが聞きました。

ミス・ペティグールはこれまでよんどころのない事情がないのにタクシーに乗ったことは一度もありません。最後の仕上げ、これで完璧です。後ろに寄りかかり、ロンドンの街が後ろに飛ぶように流れていくのを夢見心地で眺めました。でも夢と違ってもちやんと筋道の通った夢です。角を曲がったら悪夢に変わったりしないのです。どこに向かっているのかはさっぱり見当がつきませんでした。これまではいつだってロンドンの入り組んだ迷路のような街が怖くて、道を覚えられたためしがないのですから。三人は車を止めると、中敷を一組買いました。また先を急ぎます。そしてある家の前で停まりました。窓という窓に明かりが灯っています。みんな車を降りました。ミス・ラフォース

がタクシー代を払います。ドアをノックすると中に通されました。誰もミス・ペティグルーに「あんたは誰だ」なんて聞きません。

「すつごく遅れちゃったわ」とミス・デュバリーが言いました。

メイドが化粧室に三人を通しました。他には誰もいません。

「大丈夫よ、メイジー」とミス・ラフォース。「自分で行けるから」

メイドは下がっていききました。

ミス・ラフォースとミス・デュバリーは鼻のあたみに白粉をはたきます。

「さ、こつちに来て、グウイネウエア」とミス・ラフォース。

「鼻にパウダーをはたかなくちゃ。それをしなくちゃ決まらないのよ。登場前の最後の準備は 鼻のあたみにパウダーなの。自信がわいてくるから」

震える指で、おたおたと不器用に、でも嬉しそうに、ミス・ペティグルーは生まれて初めて、自分の鼻に白粉をはたきました。

「本当ですわ」とミス・ペティグルーは朗らかに言いました。「おつしゃるとおりですわね。確かに物腰にいくらか自信を加える効果がございますわ」

「その調子！」とミス・デュバリーが褒めました。

三人は一階に降りていきます。閉じた扉の向こうから、騒がしいパーティーの物音が聞こえてきます。急にミス・ペティグルーは不安になりました。その場に根が生えたように立ちつくします。気後れがミス・ペティグルーを包みこみました。自分が今、どんな姿でいるのか、すっかり忘れていました。なにしろそれを見た時間はあまりにも短かったのです。新しい自分の姿をしつかりと心に焼き付けるには、何時間もそれを見つめていなければならないでしょう。今、ミス・ペティグルーはいつもの自分に戻っていました。いつもいつも次の仕事を探し、心配性で、役立たずで、野暮ったくて、引つ込み思案な自分。身体が震えてきます。みんなあたくしのことを笑って、じろじろ見て、こそこそ噂をするに決まっているわ。そんなの耐えられません。もう笑い者になるのはまっぴらです。これまでの人生で十分、笑い者になってきたんですから。

ミス・ラフォースとミス・デュバリーも立ち止まっていました。

「さ、いよいよよ」とミス・デュバリーが怯えたような声で言いました。

ミス・ペティグルーはミス・デュバリーの顔を見つめました。さっきまでの陽気な無頓着さが影も形もありません。雑巾みたいにしおれています。元気がなくなり、びくびくして、ミス・ペティグルーよりも怖がっているみたいです。あんまりびくくりしたのでミス・ペティグルーは不安な気持ちを忘れてしまいました。

「元氣出して、エディス」とミス・ラフォースが励まします。「彼にそんなところ見せちゃだめよ。きつとうまくいくわ。彼女、ぜったい、何かいいことを思いついてくれるから」

二人はミス・ペティグルーのほうを向きました。

「トニーのことを忘れないでね」とミス・ラフォースが勢い込んで言いました。「入っ

たとき、もし彼がいたら指差すからね」とミス・デュバリーも同じくらい勢い込んで言いました。

(なんてご親切なのかしら)とミス・ペティグルーは感激しました。(本当のお友達みたいにして下さって。わざわざ前の恋人にご紹介してくださるなんて。しかもお二人は仲たがいされているっていうのに)

「喜んでお目にかかりますわ。どうもありがとうございます」とミス・ペティグルーは熱心に言いました。

「ほらね」とミス・ラフォースは鼻高々です。「言ったでしょう? もう何か考え付いたのよ、彼女」

「どうかお願い……」とミス・デュバリーが言いかけました。

「指図しちゃだめ」とミス・ラフォースがまた止めます。「余計なおせっかいになるわ。自分でやってもらうようにしないとだめ。それが一番なの」

「忘れないでね」とミス・デュバリーはもう一度だけ絶望的に念押ししました。

ミス・ペティグルーは二人が何を言っているのか、ちんぷんかんぷんでしたが、どっちにしてもこの人たちの話すことは大体において変てこだし、理解を超えているので、深く考えないことにしました。それに質問している時間ありませんでした。ミス・ラフォースがドアを開け、ミス・ペティグルーは中にさらわれてしまったからです。

眩しさに目をぱちくりします。部屋は人で一杯でした。男性も女性もいます。混じりあつた話し声がわんわんと耳に響きます。広い部屋でした。向こうの端にはカウンターのようなものがあり、たくさんのがれが並んでいます。でも、ちゃんとあたりを見渡す暇はほとんどありませんでした。なにしろ入ったとたん、やかましい歓声があがり、あつという間に人々に取り囲まれてしまったからです。どうやらミス・ラフォースとミス・デュバリーは人気者のようでした。

「デリシア」

「エディス」

ミス・ラフォースが微笑んでいます。ミス・デュバリーは驚くべき変貌を遂げています。笑い、しゃべり、ジョークを飛ばしています。落ち込んだ様子も不幸せな表情も少しも見えません。ミス・ラフォースはしっかりとミス・ペティグルーの腕を取りました。あたりを引き回します。ミス・ペティグルーは「はじめまして」と礼儀正しく、たぶん百人くらいの人に挨拶しました。じろじろ見る人など一人もいません。笑う人もいません、冷たく挨拶する女主人も出てきません。そもそも女主人が誰なのかもわかりませんでした。あの夢見るような女性、鮮やかな赤のドレスを着て、「まあデリシア、ダーリン、来てくれて嬉しいわ」と言ったあの人ではないかしら、と当たりをつけました。でも透き通ったグリーンドレスの別の女の人が「あたしのデリシア、あなたに会えて幸せよ」と言っています。だからそうじゃないかもしれせん。

いつの間にか手にグラスを持っていました。チャーミングな若い男性が押し付けたの

です。ウェーブのかかった黒髪、甘い声、瞳を悪戯っぽく輝かせています。ミス・ラフオースがあわてて頭を振ります。

「あたしならやめとくわ」とささやきました。「そのお酒はだめよ。テレンスのスペシャルなの。あたしがとってきてあげるわ。意地悪してるんじゃないのよ、グウィネヴィア。でも強いお酒にはあんまり慣れてないでしょう。それ、すくおく強い」

「おっしやるとおりにいたしますわ」とあわててミス・ペティグルーが言いました。「あなたが勧めないことをしようなんて夢にも思いませんとも」

ミス・ラフオースが別のグラスを持ってきました。

「はいどうぞ」ようやく一息つけたミス・ラフオースが言います。「座りたい？ どこがいいかしら？ まだ今晩があるからくたびれちゃだめよ」

「そうですね」とミス・ペティグルーは言いました。「そこに立っておりますわ。そうすれば顔を上げるたびに部屋の反対側の鏡が見えますもの。どうか見栄坊だと思わないでくださいませね。確かにちよつとはそれもございませぬけれど。でも、自分にまだ慣れておりませんの。もしときどき顔を上げて自分の姿がどんなだか確かめられたら、それはそれは自信になりますし、心が励まされるんです」

「素晴らしい考えだわ」とミス・ラフオースがうなずきます。

そしてミス・ペティグルーの先に立って、狙っていたちよつどいい場所に連れて行きました。ミス・ペティグルーはすぐに鏡に映った自分にこつそりと目をやりました。ああよかった！ 深いため息をつきます。新しい自分はちゃんとそこにいました。ここにいるほかの女性たちと違うところなんてありません。とてもさりげなく、ミス・ペティグルーは毛皮のコートの前を広げ、ベルベットのドレスがもつと見えるようにしました。あまりに気持が高ぶっていたので、自分が一人ぼっちでいるかどうかなど気にもなりませんでした。ここにいるのは眺めて、楽しんで、思い出をつくるためなのです。それで十分。ところがミス・ペティグルーは放っておかれはしませんでした。しばらくしてミス・ラフオースが姿を消しましたが、驚いたことに、他の人たちがすぐにその代わりに現れたのです。この人たちは気持ちよく話しかけてくれ、お酒を　もちろんミス・ペティグルーは断りましたが　勧めてくれました。それにこちらを見る目に尊敬がこめられているような気がします。ミス・ペティグルーは一分ごとにますますときどきわくわくしていききました。どういっわけだか分かりません。でもいつのまにかちよつとした取り巻きに囲まれているようでした。恐れていたように会話につまんで困るなんてことは全然ありません。誰かが言うことにならずに、にっこりすれば、みんな途端に嬉しそうな顔をします。たまに自分の意見を言ってみたりすると、周りの人たちはなんて素晴らしい！ という尊敬のまなざしを向けるので、ミス・ペティグルーは、これまではおしゃべりの才能をちゃんと確かめる機会にめぐまれなかったんだわ、と考え始めたほどでした。

あんまり笑って、あんまり頭を振ったために、ときどき髪が乱れてほつれ、もしかし

てだらしくなっていないかしら、と思ったのですが、ちらりと鏡を見さえすれば、ほつと安心することができました。そこでこちらを見つめるのは家庭教師のミス・ペティグルーではありません。ちょっとしどけないところが際立ってチャーミングな見知らぬ女性でした。

まだまだ親しげな軽いおしゃべりのために人々がやってきます。ご機嫌のミス・ペティグルーはミス・ラフォースがぺちゃくちゃしゃべっていることにぜんぜん気づきませんでした。ミス・ラフォースは素敵なことを自分だけの秘密にしておけなかったのです。細かいところまではつまびらかにできませんでしたが、作り話でおぎなうてさわりを話すことくらいいいんじゃないかしら？

「そうなの」とミス・ラフォース。「生まれてこの方あんな素晴らしい物まね、見たことないわ」

「いいパーティーだね」とバラエティ・スターのレジー・カートレットが美人のダンサーのフローレンス・ソマーズに言いました。

「モイラのところには人が寄ってくるわね、確かに」とミス・ソマーズ。

「あそこのご婦人は誰だい？」とレジー。

「ミス・ペティグルーよ」

「会ったことないな」

「ほんと？」いかにもわざとらしく「ブラムガン夫人の物まね、見たことないの？」

「ブラムガン夫人？」

「ブラムガン夫人よ」

「聞いたことないな」

「ブラムガン夫人を聞いたことないですって？」

「ないなあ」不安そうに「知ってなきゃまずいかな？」

「あたりまえよ」

「じゃ知ってたほうがいいな」

「この頃じゃ、内輪の話に通じてないとだめよね」としたり顔のミス・ソマーズ。

「そうだね、損するからな」

「あら失礼しなきゃ」とミス・ソマーズ。「あそこにチャーリーがいるわ。またね」

「いいパーティーですな」とレジー・カートレットは自分より格上の若手人気俳優のモリス・ディンズモアに声をかけます。

「なかなかだね」とモリスは横柄に言いました。

「毎回、新しい有名人を見つけてくるんですからな」

「有名人！ 誰？」

「ミス・ペティグルーですよ」

「ミス・ペティグルー？」

「彼女のブラムガン夫人の物まね、観たことないんですか？」信じられないという顔を

してみせます。

「ブラムガン夫人だって?」

「ブラムガン夫人はご存知でしょう、もちろん?」

「ええと……ああ、そうだ。そういえば会ったことがあるよ。デズモンズだったよね、確か?」

「たぶん」

「ミス・ペティグルーはうまく演じたの?」

「もう素晴らしい物まねだね。ドラ・デラニーなんか顔負けです」

「まさか」

「いやね……これは他言しないでもいいんですが、フィル・ゴールドバーグが彼女のスポンサーになるんじゃないかと私はにらんでるんですよ。彼女、デリシアの友達でね。デリシアはゴールドバーグのコレだし……というわけですよ」

「驚いたな!」とモーリス。

「本当ですよ。ゴールドバーグの友達となったら、これは知り合いになっておかなくちゃね」

「たしかに」とモーリスもつなずきます。急ぎ足でその場を離れました。

「こんにちは、イヴリン!」モーリスがさらに自分よりも格上の若手女優に声をかけました。

「ごきげんよう、モーリス」

「もうあのご婦人に会いました?」

「どのご婦人?」

「またまた、知ってるくせに」

「あたしが誰を知ってるの?」

「ミス・ペティグルーですよ」

「え?……ああ……ミス・ペティグルーね」

「未来のスターですよ」

「あ……ええと……考えてみたら、ポスターを見た気がするわ」

「彼女がブラムガン夫人を演じたの観てないんですか?」

「ブラムガン夫人?」

「そう」わざとらしく「ブラムガン夫人って聞いたことあるでしょう?」

「ああ……ええ。ええ。もちろん知ってるわ。彼女、ブラムガン夫人を演じたのね?」

「地方では大成功だったそうですよ」

「あら、地方!」と声が冷やかになりました。

「次はロンドンです」如才なく答えます。

「ロンドン?」

「ええもちろん。フィル・ゴールドバーグがついてるんです。彼の新しいレビューの」

メデイ・スターですよ。デリシア・ラフォースの向こうを張ってね」

「ああ、それを聞いてわかったわ。確かに聞いたことある」とイウリンはうなずきました。

「分かりませんよね。昨日のどこかの馬の骨が、明日のロンドンの女王だ」

「ええ、そうね。あたし、ちょっと挨拶してくるわ」

ミス・ペティグルーは誰が来ても歓迎しました。目をきらきらさせ、顔を輝かせ、髪をわずかに乱し、でも、その乱れ方はとても芸術的で、ミス・デュバリーのウエアは健在です。イヤリングが洗練された感じにきらめきます。頬は自然に赤みが差し、興奮で胸がはちきれそうです。

ミス・ラフォースが腕に触れました。ミス・ペティグルーは一番新しい崇拜者から振り返りました。

「トニーよ」ミス・ラフォースがささやきます。

ミス・ペティグルーが目をやります。中背の若者でした。茶色のくしゃくしゃした髪、熱くたぎるような目、その顔にはどこかいかつくて頑固そうなところが感じられます。

あら！ ミス・ペティグルーはほっとしました。いい顔だわ。考えてたのは……考えてたのは……そう、ごろつきの遊び人だもの。娘さんは見かけによらないってことの証明だわねえ

ミス・デュバリーとトニーはもう顔を合わせています。

「ごきげんよう、トニー」とミス・デュバリーが快活にいいました。

「盛大だね」とトニーが穏やかに答えました。

ミス・デュバリーが通り過ぎます。二人ともとても冷静で、落ち着き払っていて、とても今っぽく、さりげない感じです。その後は、二人はお互いを避けていました。ミス・デュバリーは向こうの隅で元氣一杯にやっています。トニーはこっちの角で元氣一杯にやっています。

おやまあ！ とミス・ペティグルーは思いました。ずいぶんお互いを意識していること。相手に見せ付けようとして。まあまあ、なんて残念なんでしょう。好きあっているのは見えみえなのに

そのあと、ミス・デュバリーがやってきました。

「あれがトニーなの」とささやきます。

「存じてますわ」とミス・ペティグルー。

そしてミス・デュバリーを見ました。トニーがこちらを見ていないので、ミス・デュバリーは彼を見つめています。ちらりと、ミス・ペティグルーはその目に苦しみの影を見た気がしました。トニーが振り向き、ミス・デュバリーは他の誰かと笑いあっています。

突然、ミス・ペティグルーは周りの人たちにさつきほど興味がなくなりました。なんといったって、この人たちは赤の他人です。でも、ミス・デュバリーは友達なのです。ミ

ス・デユバリーが何を感じているか知ってしまった今、もう一度、幸せな気分にはなれ  
ませんでした。

こつそりとその場を離れ、バーの端の隅っここのところで背の高いスツールを見つけて  
そこに腰掛けました。

(ああ困ったわねえ!) とミス・ペティグルーは思いました。(あの若い人が聞き分  
けてくれたらいいんだけど。ミス・デユバリーがあんなふうに悲しんでいるなんてあ  
たくし耐えられない。若い時分というのはほんとにあつという間なんですよ)

ミス・ラフォースがやってきました。

「グウイネヴィア」とミス・ラフォース。「こちらトニーよ。あたしの友達」

「ごきげんよう」とミス・ペティグルー。

「はじめまして」とトニー。

「仲良くしてね」ミス・ラフォースは陽気に言つと姿を消しました。

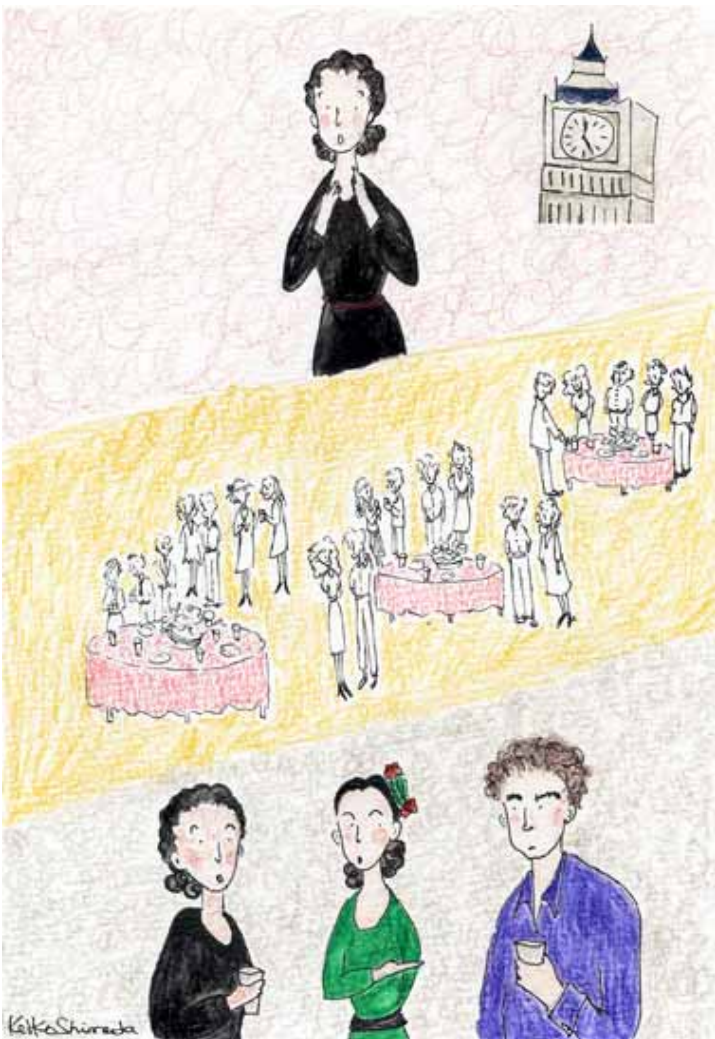
「何か飲みものをとってきましょう」トニーが愛想よく言いました。

「ありがとう」とミス・ペティグルーは考え込みながら答えました。「そつね、頂きま  
しょうか」

(もう二杯は頂いたけれど)とミス・ペティグルーは思慮を働かせます。(でも何も変  
なことにはなっていないわ。もう一杯飲んで大丈夫でしょう。それに頂くわって答えた  
ほうが、この人たち、一目おいてくれるみたいだし)

トニーは観察するような目を向けました。女性を見る目には自信があるのです。イヤ  
リングの意味ありげなきらめき、ドレスの優美なカット。それにしたがった結論は……

「《蛇の毒汁》かな?」



島田圭子画

「え？……ああ、そう？ ええ、もちろんそれよ」とミス・ペティグルーはいくらかうたえながら言いました。

トニーがお酒を運んできます。ミス・ペティグルーは半分くらいを一息に飲み干しました。トニーは感じ入ったように見つめています。ぐらりとした瞬間、ミス・ペティグルーはもしかして、本物の毒だったのかしら、と思いました。椅子に座ったまましんと静まり返っています。動くどころではありません。炎が喉元を駆け下りていったかと思うと、床がぐらりと持ち上がります。椅子がゆらゆらと傾きます。あら目がどうかしてしまっただのかしら？ おや、すべてが元に戻りました。部屋は動いていません。椅子もちゃんと静かに立っています。ミス・ペティグルーは落っこちないでその上に座っています。ミス・ペティグルーはにっこりと笑いました。

なんていい気分なんでしょう。威勢よく、なんでもどんとこい、という感じになってきました。素晴らしい気分です。これまでのびくびくした自分のことを苦々しく振り返りました。あたしっいたらほんとかたらない女だったこと！ 恐怖なんて！ このあたしが一度だつて何かを怖がったことがあるかしら？ とんでもない。好戦的な気分がめらめらと燃えてきます。勝利の栄光によってこの火花を沈め、自分の力を証明するために、誰かと一戦を交えたくなってきました。瞳に戦いの炎を燃やしながら部屋を見渡します。さあ、あたくしの相手になるのは誰？

トニーが傍らに、とても控えめに立っていました。人ごみの中に戻りたくないようです。彼を見て、ミス・ペティグルーの心に記憶が呼び覚まされました。トニーの目は、ミス・デュバリーがこちらを見ていないとき、ずっとその後を追っています。ミス・ペティグルーは思い出しました。そろりそろりと立ち上がります。

「ふん！」とミス・ペティグルー。「それで、あなたがトニーですって？」

彼は目を丸くしました。

「ええ。僕がトニーですけど」

「お会いしてみたかったのよ」

「それはありがとう」

「どういたしまして、まぬけな青二才っていうのは」とミス・ペティグルー。「面白いものだから」

「なんですって？」トニーがびくくりして息をのみました。

「まぬけ」とミス・ペティグルー。

「僕が？」

「あなたよ」

「なんだ」トニーが愛嬌よく答えます。「僕を」存知なんて知らなかったな」

「知りすぎよ」

彼は興味をひかれたようです。

「でもどうしてまぬけなんです？」

「ああ、聞いたってしょうがないわ」とミス・ペティグルーは鼻であしらいました。「あたくしは若い人たちの愚かな行いについて、お話を聞くことに学問的な興味があります。ただそれだけ。若い馬鹿者になっても許される年齢は過ぎましたから、興味をもつといつても真似したりはしませんわ」

「それが僕となんのかかわりがあるんですか？」とトニーがにらみました。

「たまたま、そういう馬鹿者の一人だったのよ」とミス・ペティグルーがにらみかえします。

「誰が僕を馬鹿だつて言ったんだ？」トニーがけんか腰で問いただします。

その顔はだんだん赤くなつてきて、目が怒りに燃えています。

「誰でもないわ……正確に言えば」とミス・ペティグルーは皮肉たっぷりに言いました。

「聞いたことからあたくしが判断したまでのことだから」

「何を聞いたんだ？」

「ごちゃごちゃ説明するなんてめんどくさいわ」とミス・ペティグルーが見下すように言います。「あたくし、ただ『まあ、なんて馬鹿な青年かしら』って思ってその人を見てみたかっただけなのよ。これで満足だわ」

「何に満足したつて？」

「あたくしの判断よ」

「いい加減にしろよ！」トニーがわめきました。にらみつけて「いったい誰に口をきいてるつもりだ？ 誰にも俺のことを馬鹿呼ばわりなんてさせないぞ」

「それじゃ、馬鹿みたいなことしなきゃいいじゃないの」

「俺が？」

「そうよ」とミス・ペティグルーは憐れむように言いました。「まあ、あなただけが悪いんじゃないけれど。若い人つてみんな分別がないものね。あたくしの年になれば人が本当のことを言っているときと、そうでないときの区別がつくようになりますよ」

「あந்தの年にならなかつて、周りの奴が本当のことを言ってるかどうかわからい分かんね」

ミス・ペティグルーが優越感をちらつかせて微笑みます。トニーが真っ赤になりました。

「何をにやにやしてるんだよ？」

「微笑んでるのよ」とミス・ペティグルーは威厳をもって答えました。「それに優しい気持ちで微笑んでるのよ。ま、気にしないでちょうだいな。あたくし、若い方のお話を聞くのすきなよ。面白くつて。自分が賢いって思い込んでるわね。あたくしはもうだまされないうすむ年になつてよかつたわ」

「俺をだますやつなんていないぞ」

「あなた自身を除けばね」

「何を……」

「まあいいじゃないの」とミス・ペティグルーは今度は皮肉たっぷりに言いました。「あなたは正しいんだから。恋愛なんてものはたいしたことじゃないんですよ。あたくしの年になればお分かりになるわ。道を誤らなくてすんだって感謝するわよ。そつなつた理由は馬鹿馬鹿しくてよね」

「あんたね」とトニーがかんかんになって大声を出しました。「今度、『あたくしの年』、『あなたの年』って言ったら、非常手段に出るからな」

「あらでも」とミス。ペティグルー。「あたくし、彼女も運がいいのは同じだと思ってるよ。ミス・ラフォースにも言ったんですよ、『彼を片付けられてよかったわね』って。あたくし、あなたのお友達のことをそれほどよく知らないけれど、女性が本当のことを話しているときは分かりますもの。あたくしの仕事をしてればまあ当然のことよ。子供は本当によく嘘をつくから。嘘なのか嘘じゃないのか、第六感でぴんとくるようになるんですよ」

「ちよつとちよつと」とトニーが煙に巻かれて言いました。「いったいあんたはなんの話をしてるんだ?」

「あたくしの職業よ」とミス・ペティグルーが胸をはりました。

「で、それは?」

「教師です」

「何を教えるの?」

「子供です」

「かんべんしてくれ!」トニーは弱々しくいきました。「落ち着くんだ」と頼み込みます。「頭を冷やして。冷静になってくれ。さあ……考えて。いったい僕らは何のことを話してるんだ?」

ミス・ペティグルーは考えました。深く静かに考えました。やってみると集中するのは、なかなか簡単ではありません。質問と答え。そのときひらめきがやってきました。

「あなたの前の婚約者のことですよ、もちろん」

「エディス」トニーが大声を出しました。

「ですから」と考えていた」と口にしたことがごっちゃになって、憤然としたミス・ペティグルーは言いました。「彼女に言ったんですよ。どつして、自分の好きでしょっちゅう大騒ぎしているだけの男にかかざらわってるのって。そんなのつまらないわよって」

「俺は好きで騒ぎ立てたりしないぞ」とトニーがかつとて言いました。

「でも」とミス・ペティグルー。「でも、自分をおとしめているのは確かよ」

「いったい全体なんなんだ! 何の話なんだよ?」トニーは絶望的になりました。「それが何のかかわりがあるんだ?」

「静かにしなさい」とミス・ペティグルーが厳しく言いました。「しっかりして。ね、あなたがいなくなると、必ず女性たちはあなたのことを忘れると思っつ〜」

「忘れないよ」

「馬鹿」

「馬鹿？ 何が馬鹿なんだよ？ あんたに何が分かるんだ？」

ミス・ペティグルーは腹が立つほど落ち着き払っていました。心は美しく、すつきりと澄みきっています。何も悩まされるものはありません。素晴らしく冴えわたった返答が唇からこぼれ出ます。こんな若造なんか、あたくしにかかったら一ひねり。

「それじゃ、ご自分が言うように、そんなに自信たっぷりなら、留守の間に女性が他の男に気持ちを移すかも、なんて思ったこともありませんわね」

「あたりまえだ」

「それじゃどうして」ミス・ペティグルーはまた怖い顔をして聞きました。「そんなふりをするの？ それはしがらみから逃れようとする臆病者のやり方よ。それも、あたくしに言わせれば、すごく臆病なやり方よ。裏口からこそそこそ逃げ出すみたいだね。見るからに下劣だわ」ミス・ペティグルーは勝ち誇ったように口をとじました。

「なんのしがらみ？ どの裏口？」トニーはわめきます。髪の毛を引きむしらんばかりです。

「つまらない作り話なんかして。どうしてさっさと、飽きたんだって言っつて、男らしくしなかつたのよ？」

「何に飽きるんだ？」

「ミス・デュバリーよ」

「俺はミス・デュバリーに飽きてなんかいないぞ」

「あらあら、びつくり！」とミス・ペティグルーは身を乗り出して言いました。「それはおかしいわ。ミス・デュバリーに飽きてないって言っつね。ミス・デュバリーもあなたに飽きてないって……あら、それじゃ、周りの人はなんて思っつかしら？」

「誰が周りの奴の意見を聞くんだ？」

「チヨースーも言っつてるわ。殺人は必ず明るみになるのよ」とミス・ペティグルーがにらみつけるように言いました。「そもそもそっ考えていたんですよ。今もそっだけど」

「何がそっなんだよ？」

「だからあなたがまぬけな青二才だっつて考えてたの」

「へえ、そっかい」

「ええそっよ」

二人は互いににらみ合います。ミス・ペティグルーは生まれてこの方、これほど誰かに無礼な口をきいたことはありません。突然、そのことを思い出しました。いったいあたくししたら何を言っつたのかしら？ なんだかそわそわした気分になってきました。おや、さっきのお酒が半分グラスに残っています。それを一息で飲み下しました。かっとな熱いものが喉を通ります。あつという間に気分がよくなりました。さあ、しっかりと罰を当ててやらなくちゃ。大事な親友のミス・デュバリーをあんなに深く傷つけたんです

から。さらに怒りをこめてにらみつけ直します。

「あんなに彼女はあなたが好きだっていうのに」

「へえ！ 彼女、俺が好きだって？」とトニーが皮肉っぽく言います。

「そう言っただけか？」

「ああ、口ではね」

「はつきり分らないの？」

「だって、彼女……」

「まあねえ！」ミス・ペティグルーはうまくあてこすります。「若い人の理解力ときたら……」

「そうだよ、彼女、俺が好きだったよ」トニーが怒鳴ります。

「あなたは違ったの？」

トニーがにらみます。ぐつと息をのみこみます。顔が赤くなりました。

「ああ」と、トニー。「好きだったよ」

「おやまあ」とミス・ペティグルー。「こんな馬鹿らしい話、聞いたことないわ。彼女が約束を守ってもうあなたとかかわりをもたないでくれるといいんだけど」

「へえ、そんな約束したのか？」

「ええしたわ」とミス・ペティグルーはむきになりました。「それにあたくしそれが一番だと思っの。こんなにはつきりと物を言うのは好かないのだけれど、この年になつたら少しは許されますわね。あなたにお目にかかってからずっと、あたくし、ミス・デュバリーはもっとと大人で、判断力のしつかりした人を他に見つけたほうがずっと賢いって思っていたのよ。結婚は遊びじゃありませんからね」

「じゃ、あなたは彼女を誰か別の奴と結婚させようとしてるのか？」トニーがのぼせあがります。

「そう勧めるつもりよ」とミス・ペティグルーも同じくらいつかつかとして言いました。

「彼女があなたと別れてよかったわ」

「それじゃ俺とは終わったって言うのか？」

「終わってないの？」

「終わったかどうか、それじゃ聞いてみよう」

トニーは振り返ると怖い目であたりを見渡しました。ミス・デュバリーは遠くないところに座っています。にらんだ範囲にちゃんと入っています。彼女は用心しいしい、そろりそろりと近くに寄ってきていたのです。ミス・ペティグルーとトニーが隅のほうで何か話していて、気になって気になって、とても聞かないではいられなかったのです。もし自分がいるほうがいい展開になったら、すぐそばにいたほうがいいでしょう。そしていよいよそのときが来たのです。

「エディス」トニーが低く、せきたてるような思いつめた声で呼びかけました。

ミス・デュバリーは何気なく近づきます。

「それじゃ、君は僕とは終わったって言うのか？」トニーが低い声で吐き出すように言いました。

ミス・デュバリーは大慌てで曲芸のように頭を働かせました。ミス・ペティグルーを横目で見ます。どうやらここでは微妙な企てが進んでいるようです。うつかりしたことをしたら肝心なところをだいなしにしてしまうかも。困ったときは質問を繰り返すのが一番です。

「あらそつなの？」ミス・デュバリーは意にも介さないふうに言いました。

「それに君は僕が精神的に未熟だって言うんだな？」

「あら」ミス・デュバリーは用心深く尋ねます。「そつなの？」

「はん！」トニーはまた爆発しました。「おまけに別の誰かと結婚するって言うんだ」

「あら」ミス・デュバリーは言い、へまをしないように必死にざぐりざぐり「でもあたしも〇代っていうわけじゃないし。そろそろ落ち着いたほつがいいかしらって……だから、もしあなたがあたしと結婚したくないなら……」

「だから、僕に二度と会いたくないっていうんだろつ？」

「まあ！」ミス・デュバリーは慎重に言いました。「そんなひどいことは言わないわ、トニー。あなたが意地悪をしたときに、かつとして言うちゃっただけよ。お友達でいたっていいじゃない」

「友達だつて！」トニーはまたかつとしました。「友達！ 本気か？」

「ええ、まあ、そつよ」ミス・デュバリーはちよつとおどおどしながら言いました。話が危なっかしい方向に進んでいきます。何がどうなっているのかしら。カーテンの後ろに隠れていられたのは残念です。でももし隠れていたら、どつやつて威厳をそこなわずに出てこられたでしょう？」

「それじゃ、僕のことをそんなにあつさり片付けられるような男だと思ってるのか？」トニーが問いただします。

「え、いえ」ミス・デュバリーは慌てました。「つまり……あなたいつもしつこかったもの」

「ああ、だろつね」

「ほらね」ミス・デュバリーは縮こまりました。

「ご同意ありがとうございます」トニーがけんか腰で言いました。「ひっかけられたり、捨てられたり、女性の好き勝手にされるような僕じゃない」

「もちろんよ」

「それは分かっているんだな」

「もちろんよ」

「じゃあ、どついつことなんだ？」

「まあ！」あんまりどきんとしたので、心臓が口から飛び出すのが見えるんじゃないかと思つたほどでした。本能的に両腕を広げてトニーを胸にかき抱こつたのですが、

生まれ持った賢さが思いとどまらせました。

「分からないわ」ミス・デュバリーはつんと言いました。「嘘つきって言われたい女の子はいないと思うの。たとえ本当に嘘つきでもね。でも本当に本当のことを言ったら……」

「ああそうかい」トニーの目が怒りに燃えました。「僕は謝ったじゃないか……でもそれが君の気持ちだって言うなら……」その場を離れようとしています。

「トニー！」ミス・デュバリーがせつなげに呼びかけます。

「エディス」トニーがかすれた声で答えます。

ミス・ペティグルーはにこにこして二人を見守りながら立っていました。ミス・デュバリーとトニーがいったい何を話しているのかほとんどさっぱり分かりませんでしたし、さつきから言っていることはどうにも不可解でした。けれど、とにかく結末は二人にとって喜ばしいものようで、なにより大切なのはそこなのです。ミス・デュバリーはとても幸せそうだったので、ミス・ペティグルーはトニーのしたことを全部、勘弁してやりました。

少し不安げに部屋の中を見渡します。こんな人前で感情をあらわにするなんてちょっと恥ずかしいことです。それに女性の側としたら、とても……その、まあ、とてもなにはですから。

でも、誰も少しも気づいていませんでした。皆、しゃべっています。誰も聞いてなにかいけません。トニーがミス・デュバリーをうつとりと見つめるのじゃなく、首を絞めているところだったとしても部屋の中の誰一人気づかなかったでしょう。ミス・ペティグルーはほつと安堵の小さなため息をつきました。

ミス・デュバリーがぐるりと振り返りました。ミス・ペティグルーを文字通り星のこたくきらきら光る瞳で見つめます。

「ああ！」ミス・デュバリーがあえぎました。「あなたってなんて素晴らしいの」

ミス・ペティグルーはきよとんとしました。そこをミス・デュバリーが抱きかかえ、耳にささやきます。

「どうやってお礼をすればいいのかしら？」

ミス・ペティグルーは心の底から嬉しくなりました。でも、若い二人が仲直りできたことはよく分かりましたが、いったいどうしてこうなったのでしょうか？

「まあまあ！」ミス・ペティグルーはささやきました。「お幸せになってくださいましね」

お化粧も、外見の大切さも、本当はどんな顔だかをトニーが見てしまつかもしれないことにもかまわずに、ミス・デュバリーは目に涙を浮かべました。実のところ、一粒か二粒が転がり落ち、マスカラのかすかな黒いにじみ跡を残しました。

「たいへん！」ミス・デュバリーが息をのみました。「あたし、ひどい顔でしょう」

「完璧だよ」トニーが愛しげに言いました。

「あだし、クロークに行かなくちゃ」あわてたミス・デュバリーが言いました。

「一緒に行くよ」とトニー。

二人は出て行きました。ミス・ペティグルーは二人の背中を、優しい母親のような温かいまなざしで見送りました。

(二人とも可愛いこと) 感傷的に思います。(ちょっとした恋人同士のいさかいだっただわ。お互いを見たるとたん忘れちゃったのね)

そして小さくしゃっくりしました。

(あらあら)(ミス・ペティグルーは思いました。(消化不良ですよ。今晚、胃薬を飲んでおかなくちゃ)